

文化



「すべて剣をやる者は剣で死すべし」と書いた阿波根昌鴻の人生を振り返るため、写真集を出版した阿波根

土のにおい 非暴力の闘い



「すべて剣をやる者は剣で死すべし」基地をもつ国は基地で「核を持つ国は核で死す」。外壁にそう大書された私設の資料館が、沖縄本島の本部半島沖に浮かぶ伊江島にある。1984年に開設して40年余りがたつ「反戦平和資料館」又チドゥタカラの家。ヌナツタカラは命こそ宝」という意味の方言だ。館内に展示されているのは、サトウキビ栽培などで暮らす島民が戦後、米軍の強制土地収用にあらがった「土地闘争」を今に伝える写真や旗のほか、米軍演習地で拾い集めた砲弾の残核、葉書き、パンシュート、鉄条網など。

この人の「反核」 阿波根昌鴻(農民・反戦地主、1901〜2002年)



あはごん・しょうこう 沖縄県本部町生まれ。伊江島で家庭を持った後、農業移民として単身でキューバやペルーに渡り、1934年に帰国。戦後、米軍統治下の島で「土地闘争」を率い、66年の第12回原水禁世界大会にも出席している。著書に「米軍と農民」「命こそ宝」(いずれも岩波新書)など。写真は一般財団法人わびあいの里提供。

沖縄から 今を射抜く語り

終戦から10年近かった1955年3月、沖縄戦の激戦地でもあった伊江島に、約300人の米兵が「再上陸」した。「銃剣とブルドーザー」の言葉で語り継がれる、沖縄各地であった強制的な土地接取の一つ。島の北部で81戸の土地を奪い、阿波根宅を含む16戸をブルドーザーで破壊、焼き払うなどして射撃演習場にした。

約23平方キロの伊江島は、既存の基地と合わせた米軍用地と化した。阿波根たちは、土地という生活の糧を取り返すための闘いを強いられた。

55年といえば、本土では前年の第五福竜丸事件を受けた原水爆禁止署名が野火のように広がった。8月に第1回原水禁世界大会が開かれた年だ。その頃、沖縄では米軍の暴力がこのように顕在化し、核兵器の配備まで始まっていた。

沖縄本島の嘉手納基地に56年、戦術核ミサイル「ネオスト・シムロン」が持ち込まれ、60年代に入る、核巡航ミサイル「マ

ルスB1」の配備が進む。72年の本土復帰を期望に撤去されていくが、ビークの67年には1000発の核兵器がひしめいたとされる。伊江島は、まさに核戦争をも想定した演習場だった。BDU12型、8型といった核機敏弾頭を有する戦術核から地面に突き刺さった。

阿波根たちは、それを目の当たりにしながら土地闘争を続けたのだ。住民の苦境を米軍の非道な訴える郡議での座り込みや、沖縄本島を縦断する行進、演習、投獄されながらも演習地の糧を越えて耕作し、イモやマメなどで生きるための食料を賄った。ヌナツタカラの家に

ある砲弾類は、鉄くずとしての価値も意識して集めた一団だ。「思想より生活が先にある。本土においする闘い」。伊江島で1歳から15歳までを過ごし、米軍留守を経て3年前に島に戻った文筆家の櫻本空(あひ)は、阿波根たちの運動をその形容する。父親が阿波根に「弟子入り」するために移住し、自身も阿波根を「おじい」と慕った。

阿波根たちが話し合っていた定め、米軍と向き合う際のルール「陳情規定」が伝わる。「耳より」に手をあげない。「ウソ偽りを絶対に語らない」「人間性をおおいては、生産者であるわれわれ農民の方が軍人に優っている。破壊者である軍人を教え導く心構えが大切である」。核の威力さえ脅かした米軍と、丸腰の農民。圧倒的に非対称な力関係の中で、阿波根の非暴力思想は戦略としても揺るぎないものだった。反核の訴えも「日々、命が脅かされる切実さの中で語られた」と櫻本さんは言う。

伊江島の土地闘争は沖縄各地の反基地闘争も刺激した。米軍による地代の支払いなどに一定のルールが確立され、本土復帰運動にもつながっていく。伊江島の米軍用地は復帰までに、全体の6割から3割に縮減。阿波根はその後も「反戦地主」の一人として、米軍に土地を提供し続ける国策や課税を巡る訴訟を闘った。

今、阿波根たちの闘いに再び光が当てられている。昨年2〜5月、原爆の図丸本条館跡地玉泉山公園で、阿波根が土地闘争の間に撮りためた写真が沖縄県外で初めて展覧会の形で紹介された。今年1月までに京都、東京にも巡回した。米軍演習による被害の証拠を残すなど、抵抗の手段としてカメラを手にした阿波根が、住民の日常の表情も捉えている。伊江島に残るネガからデジタルプリントし、展覧会のキュレーターを務めた東京芸大の大原真史准教授(66)は「時空を超え、その現代性について」「基地問題は、今も全く終わっていない」と端的に語る。近く写真集にまとめるという。

櫻本さんも、著書で阿波根の生きざまをたどることを構想中だ。「英雄視するような本にはしない。島の風土、人々と共に生きた当たり前人間として描きたい」。

阿波根は92年の著書「命こそ宝」のあとがきに記す。「軍事力を強化する国は、国民を苦しめる悪い国であります。それに武器に頼って生きる人間より不幸な人間はありません。素朴な「丸腰」の語りが、沖縄や核を巡る状況も含め、日本と世界の今をまっすぐに射抜く。

連載「この人の「反核」」は今回で終わります。(道田雅重)



白い塗壁の「核機敏弾頭」などがひしめく館内。雑然とした展示が、戦争の愚かさをかえって強烈に物語る。